

「御国がきますように」

詩篇 第107篇1節～9節  
マタイによる福音書 第6章 10節a

説教 岡村 恒 牧師

〈主の祈り〉の言葉をご一緒に読み、また味わいながら歩み始めました。冒頭の2番目の祈りは「御国が来ますように」(マタイによる福音書6章10節)。英語では>Your kingdom, come (あなたの王国よ、来い)。天の父よ、あなたの名は聖とされねばならない。あなたの国が来なければならぬ。あなたの御心はひとつ残らず実現するのだ、と叫ぶようにして祈って良い。主イエス・キリストは、この祈りをそうお教えになりました。

「御国が来ますように」という祈りは本来、何を求める祈りでしょうか。しばしば、天国に入りたいとか、死んだら良い場所に行けるよという祈りではないかと誤解をされます。しかし聖書が語るのは、まことの国、本当の喜びの世界が向こうからやって来るという話です。「御国が来ますように」という祈りは直訳をすれば、神の支配が向こうから殺到して来て、地上のあらゆる支配や権力を駆逐して、神の支配だけが私たちの全てを包み込んでしまうように、そういう時と場所が早くやってくるように、そう叫ぶ激しい祈りです。例えば駅伝の走者が、前の走者が来るのを待っている時の心境です。何度も飛び跳ね、手を大きく振って、ランナーを鼓舞します。早く来い、と必死で叫ぶのです。ただ単に時が流れて特別な時がやって来たら良い、というような単純な祈りではなく、終わりの日をたぐり寄せる祈りなのです。

善良な王がいて正しい支配がなされる王国の話に聖書はします。主イエス・キリストが永遠のまことの王としておいでになった時、新しい天と新しい地、王国の領土が新しく用意されます。そしてそこに神の民が迎え入れられる。これは私たちが繰り返し聞いてきた約束です。そこに誰が入れるのか。国民名簿、別の言葉で言えば命の書に名を記されていることがはっきりしているのは、イエス・キリストを救い主として信じて信仰を告白し、罪の赦しの洗礼を受けた者です。それ以外の人々のうち誰がその国に入れられるかは、神がお決めになります。ただ、主イエス・キリストが十字架で死んだ後、陰府に下ってくださったので、あらゆる人に福音を聞くチャンスが用意され、神の憐れみが注がれていることを私たちは知っています。そして、国民が迎え入れられるところに、神の支配が完成します。死も、滅びも、悲しみも、その時には私たちが何ら傷つけることはできず、私たちの目から涙はぬぐい去られます。「神の国よ、来い」

という叫びは、私たちが本当に信仰を与えられて神の子とされ、神の国の国民として迎え入れられる、ということを感じて初めて口にすることができる言葉です。

私たちは、聖書に拠れば生まれながら罪と死の奴隷、神の裁きによって滅びるべき存在でした。しかし神は、私たちが買い戻して御自分の民としてもう一度手にするために、多大な犠牲を払って下さいました。主イエス・キリストの命です。神のひとり子が、まるで捕虜交換のように、御自分を死と滅びにお委ね下さり、その引き替えに私たちは自由な神の民とされました。私たちが目に見えない鎖で縛り付け滅びに引きずり下ろす支配の力を、イエス・キリストの命が打ち破り、罪の縄目と呼ばれる束縛を全部断ち切って自由にし、本当の命を持つものに造り変えて下さった。だから終わりの日を、神の国を心待ちにできるようになった。「神の国よ、来い」と祈ることができるように変えられた。これが聖書が語る救いです。神の国が来る。神の支配が全てのものを凌駕し、私たちの全身全霊を包み込んでしまう。それは本当の解放の日です。私たちが神のものであることを一瞬たりとも疑う余地無く、忘れる必要も可能性も無く、味わいながら歩む時です。

代々の教会は、2,000年に渡ってひたすらこの時を待ち望み、叫ぶように祈り続けました。主イエス・キリストがあのかross架の上で血を流し、私の贖いとなって私を死と滅びから買い戻して下さいました。そのことを知って、主にお会いする日が楽しみでならないという思いで歩み始めるなら、その歩みは希望と喜びに満ちた歩みです。そこにはもはや恐れや不安、絶望の入り込む余地さえありません。もう既に神の国はあなたがたのただ中にあるのだ、と主イエスご自身が宣言をされました。

「御国が来ますように」。この祈りは私たちが神の国への旅路の用意をして祈って良い祈りです。しかし実は、私たちがそう祈れない時も、神の国は今、この瞬間も私たちに向かってやって来つつあります。これは確実です。私たちはその日を喜びをもって待ち望み、祈りつつ、叫びつつ歩みたいと思います。聖霊なる神がこの祈りを私たちの口に入れて下さり、確信をもって祈らせて下さいます。

(記 説教要約奉仕者)